3　次の文章を読んで、問１〜６に答えよ。　〈神戸大〉　二〇一六年度出題

　今は昔、天竺のにひとつの小あり。その寺に等身の仏おはす。この寺は、この国の前天皇の御願なり。仏の御頭には、には玉を入れたり。この玉、世にならびなき宝なり。値限りなし。その時に貧しき人ありて、「この仏の眉間の玉限りなき宝なり。もしわれこの玉を取りて、買はむ人に与へたらば、子孫七代まで家楽しく、身豊かにして、貧しき思ひなからむ」。しかるに、この寺に夜半に入らむに、東西を閉ぢて、門戸守る人たゆみなく、たまたまに出入する人をばを問ひ、行き所を尋ぬれば、①さらにずちなし。しかりといへども、あひかまへて門戸のもとをうがちこぼちてみそかに入りぬ。寄りて仏の御頭の玉を取らむとするほどに、この仏、やうやく高くなり給ひて及び付かれず。(A)盗人高き物踏まへてまた及べども、いよいよ高くなりまさり給ふ。

　しかれば、盗人、「この仏はもとは等身なり。かく高くなりまさり給ふは玉を惜しみ給ふなめり」と思ひて退き、して仏に申さく、「仏の世にでての道を行じ給ひしことは、われら衆生を利益抜済し給はむがためなり。伝へ聞けば、人をすくひ給ふ道には②身をもむさぼらず、命をも捨て給ふ。いはゆる一羽のに身を捨て、七つの虎に命を亡ぼし、眼をくじりてにし、血を出だして婆羅門に飲ましめ、かくのごとくのありがたきことをそら施し給ふ。いかにいはんや、この玉を惜しみ給ふべからず。貧しきをすくひを助け給はむ、ただこれなり。③おぼろけにては仏の眉間の玉をば下ろすべしやは。なまじひに生きめぐりて、世間を思ひわびて限りなき罪障を造らむとす。いかでかかく高くなり給ひて頭の玉を惜しみ給ふ。（B)思ひにすでにひぬ」とく哭く申しければ、仏高くなり給ふ心地に頭をたれて盗人の及ぶばかりになり給ひぬ。しかれば、「仏、わが申すことによりて、玉を取れとおぼしめすなりけり」と思ひて、寄りて眉間の玉を取りて出でぬ。夜明けて、寺の内のどもこれをみて、「仏の眉間の玉は、いかなればなきぞ。盗人の取りてけるなめり」と思ひて求め尋ぬれども、の盗めると知らず。

　その後、この盗人、この玉をもつて市に出でて売るに、この玉を見知れる人ありて、「この玉は、それの寺にまします仏の眉間の玉近ごろせたる、これなり」とひて、この玉売る者を捕へて、国王に奉りつ。召し問はるる時に、隠さずしてありのままに申す。  
 ④国王このことを用ゐ給はずして、かの寺に使ひを遣はして見せしめ給ふ。使ひかの寺に行きて見るに、仏頭をうなだれて立ち給へり。使ひかへりてこの由を申す。国王この由を聞き給ひて、悲しびの心をおこして盗人を召して、値を限らず玉を買ひ取りて、もとの寺の仏に返し奉り給ひて、（C）盗人をばゆるしつ。

　まことに心をいたして念ずる仏の慈悲は、盗人をもあはれび給ふなりけり。その仏、今に至るまでうなだれて立ち給へりとなむ語り伝へたるとや。 （『今昔物語集』より）

〔注〕　○僧迦羅国――現在のスリランカ。

○伽藍――寺院。

○御願――国王・・王子などの発願によって建てられた寺。

○合掌頂礼――手を合わせ、頭を地につける最敬礼。

○菩薩の道――悟り（仏）の世界の一歩手前にとどまって、衆生救済に努めること。

○利益抜済――利益をほどこし、救済すること。

○一羽の鳩に身を捨て――に襲われた鳩を助けるために、自分の肉を鷲に与えたというの前世の話。

○七つの虎に命を亡ぼし――飢えた母虎と七頭の子虎のために自分の身を与えたという釈迦の前世の話。

○眼をくじりて婆羅門に施し――盲目の婆羅門に自分の目を与えたという釈迦の前世の話。

○婆羅門――古代インドの身分制で最高位にある僧侶・祭司階級の人。

○血を出だして婆羅門に飲ましめ――飢えた婆羅門に自分の血を飲ませたという釈迦の前世の話。

○心地に――様子を見せながら。

○比丘――出家した男性。

問１　次の作品群の中で、『今昔物語集』より古い時代に成立した説話集はどれか、一つ選び、記号で答えよ。

イ　『宇治拾遺物語』　　ロ　『古今著聞集』　　ハ　『沙石集』

ニ　『発心集』　　ホ　『日本霊異記』

問２　本文中に使われている尊敬語の本動詞を四つ、終止形で記せ。同一の本動詞は、一度挙げるのみでよい。

問３　傍線部①～④を、それぞれ現代語訳せよ。

問４　傍線部A「盗人高き物踏まへてまた及べども、いよいよ高くなりまさり給ふ」とあるが、どのようなことを述べているか、七〇字以内で説明せよ。

問５　傍線部B「思ひ」とは、誰のどのような思いか、文脈に即して五〇字以内で説明せよ。

◎問６　傍線部C「盗人をばゆるしつ」とあるが、国王はなぜそのような処置をしたか、本文に即して八〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ホ

問２　おはす・おぼしめす・まします・召す

「遣はす」が加わった四つでも可であるが、示したものが優先だろ

う。

問３　①＝まったくどうしようもない

　　　②＝自分の身に執着せず

　　　　　「自分の」がないものは減点３。

　　　③＝並大抵のことで仏の眉間の玉を取り下ろすことができようか、いやできはしないだろう

反語になっていないものは全体０。「並大抵でない（並一通りでない）」がないものは減点３。

　　　④＝国王は盗人の話すことを信用なさらないで

「このこと」が「盗人の話すこと」となっていないものは減点５。

「用ゐる」の訳「信用する、鵜呑みにする」がないものは減点３。

「給ふ」が尊敬の意味になっていないものは減点１。

問４　Ａ盗人が仏の眉間の玉を取ろうとするとＢ仏は頭を高くするので、Ｃ盗人は台に上がって取ろうとするが、Ｄ仏は取れないようにさらに頭を高くしたということ。（69字）

Ａ＝１／Ｂ＝２／Ｃ＝３／Ｄ＝４

問５　Ａ仏は人々を救うために命さえも捨てるのだから、Ｂ貧しい自分が玉を取ることも許すはずだという盗人の思い。（49字）

Ａ＝５〔「救う」がないものは０。「犠牲」の意味がないものは減点２。〕

Ｂ＝５〔「盗人の思い」でないものは０。「貧しい」がないものは減点１。〕

問６　Ａ国王は、頭をうなだれた仏の様子を聞いて、盗人に玉を与えたのが本当だとわかり、Ｂ真心を尽くして訴えると仏は盗人にさえも憐れまれるのだと、仏の慈悲の心に感動したから。（80字）

Ａ＝５〔「盗人に玉を与えたの」を「盗人の話」と置き換えてもよい。〕

Ｂ＝５〔「仏の慈悲」がないものは減点４。〕

【現代語訳】

　今はもう昔の話になったが、天竺の僧迦羅国に一つの小さな寺院があった。その寺には等身大の仏がいらっしゃった。この寺は、この国の先代の天皇の発願（によって建てられたもの）である。仏の御頭には、眉間に玉を入れている。この玉は、この世で並びない宝である。値段は計り知れない。その時に貧しい人があって、「この仏の眉間の玉は計り知れない（貴重な）宝である。もし私がこの玉を（仏の眉間から）取って、買う人がいて売り与えたなら、子々孫々まで一家は富み栄えて、自分も裕福で、貧しいという思いをしなくてすむだろう」。しかし、この寺に夜中に忍び込もうとする場合に、東西（の門）を閉じて、門番が油断なく、偶然に出入りする者を（とどめて）姓名を尋ね、行き場所を尋ねるので、問３①まったく（手の打ちようがなく）どうしようもない。なすすべがないけれども、工夫を凝らして門戸の下を穴を開け壊してこっそりと侵入した。（仏のもとに）近寄り仏の御頭の玉を取ろうとするうちに、この仏は、次第に（背丈が）高くおなりになって届くことができない。盗人が高い物を踏み台にしてまた（仏の頭まで）届くようにしたが、ますます（仏の背丈は）高くおなりになる。

　だから、盗人は、「この仏はもとは等身大（の仏）である。このようにだんだん高くおなりになるのは玉を惜しみなさるのであるようだ」と思って後ずさりして、両手を（胸の前で）合わせ、頭を地につける最敬礼をして仏に申し上げることには、「仏がこの世に出て来て菩薩の道を行いなさったことは、われらすべての人間に利益をほどこし救済なさるためである。伝え聞くと、（すべての）人間を救済なさる道においては問３②自分の身に執着せず、命をも犠牲になさる。世間で言うところの一羽の鳩（のため）に（わが）身を捨て、七頭の虎のために（自分の）命を犠牲にして、眼の玉をえぐり取って婆羅門に施して、血を出して婆羅門に飲ませ、このように世にも稀な布施をさえなされる。ましてや、この玉を惜しみなさるはずがない。貧しい者を救い下賤の者を助けなさるようなことは、まさしくこの（玉を施し与えられる）ことである。問３③並大抵のことで仏の眉間の玉を取り下ろすことができようか、いやできはしないだろう。（玉を手に入れることができなければ）心ならずも生きながらえて、世の中を恨み嘆いては数限りない罪を犯すことになるだろう。どうしてこのように高くおなりになって頭の玉を惜しみなさるのか。（私の）思いはすっかり裏切られてしまった」と（悲しくて思い極まって）声をあげ涙を流して申したので、（さっきまでは）仏は（背丈が）高くなりなさる様子を見せながら頭をうなだれて盗人（の手）が届く程度におなりになった。手が届くようになったので、「仏は、私が申し上げたために、玉を取れとお思いになるのであったよ」と思って、（仏に）近寄って眉間の玉を取って（寺を）出た。夜が明けて、寺の中の僧たちはこれ（＝玉が取り去られた仏）を見て、「仏の眉間の玉は、どういうわけでないのか。盗人が取ってしまったのであるようだ」と思って探し求めたけれども、（いったい）誰が盗んだともわからない。

　そののち、この盗人は、この（盗んだ）玉をもって市に出かけて売ると、この玉を見知っている者があって、「この玉は、某寺にいらっしゃる仏の眉間の玉が近ごろなくなった（という）のが、これだ」と言って、この玉を売る者を捕らえて、国王に差し出した。（国王が）お呼びになって尋問なさる時に、（盗人は）隠さないでありのままに申し上げる。問３④国王はこの（盗人の話す）ことを信用なさらないで、（例の）あの寺に使者をおやりになって（仏を）見せさせなさる。使者があの寺に行って見ると、仏は頭をうなだれてお立ちになっている。使者は（国王のもとに）戻ってこの次第を申し上げる。国王はこの次第をお聞きになって、心から感動して盗人をお呼びになって、値段を制限しないで（言い値のままに）玉を買い取って、もとの寺の仏に返し申し上げなさって、盗人をお許しになった。

　じつに真心をもって祈念した（場合の）仏の慈悲は、盗人をも憐れみなさるのであるよ。その仏は、今に至るまでうなだれてお立ちになっていると語り伝えているとかいうことだ。